

【招待講演】

天吹、ごったんなどの鹿児島県固有の民族楽器について

生 駒 綱 雄

元・鹿児島県立南薩少年自然の家 主事

解説代筆：竹 内 康 人

鹿児島大学工学部 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-40
y.takeuchi@ieee.org

【Invited Lecture】

On the TENPUKU and GOTTAN, and other Ethnic Musical Instruments Peculiar to Kagoshima Prefecture, Japan

Tsunao Ikoma,

Instructor, Kagoshima Prefecture Local Government

Dictation by: Yasuhito Takeuchi

Kagoshima University Faculty of Engineering, Kagoshima 890-0065 Japan
y.takeuchi@ieee.org

あらまし： 天吹（てんぷく）、ごったん（通常ひらがな記述される）などの鹿児島県固有の民族楽器について、その音響学的な、また固有の音楽の概要を解説し、また歴史的背景などを紹介する。天吹とは標準的な尺八の約半分の寸法の同様なエアリード（無簧）木管楽器であり、尺八における一節切（ひとよぎり）と呼ばれる一群の最短また最高音域の物と酷似している。ないし、音響学の観点からは基音（調性）の設計は別として実質的に区別は難しい。天吹を特徴づけるのは、それ故に、その伝説と文化的背景、また維持伝承のされ方にあると言える。本報告ではその点をかいつまんで紹介する。一方ごったんは一般名称を当てはめるなら板三味線と言えば大衆にはそれがどんな物か概括理解されよう。すなわち三味線やバンジョーにおいては駒を介して弦から音響エネルギーを得て放射を行う放射膜が小動物の皮やプラスチックの膜である事に替えて、ごったんは薄い木の板にその作用をさせる。ごったんは弦をのぞく一切が自家工房レベルの簡易な木工作品として存在し得、かつては地域の農民は誰でも余材や廃材で自作する事が常であったように伺われる。これにもその伝説と文化的背景、また維持伝承のされ方が重要な視点となるので、本報告ではその視点から解説を試みる。以上の他に鹿児島県においては独特な楽器として薩摩琵琶があるが、これには多くの解説がある。誌面の面積や実演時間の観点から本発表および本報告では割愛させて頂く。

Abstract: This is an introductory paper for Kagoshima specific ethnic musical instrument, Tempuku (天吹、てんぷく) and Gottan (ごったん (normally expressed in hiragana)), for their musical, music-acoustical, cultural and historical aspects. Tempuku is an air reed woodwind instrument, or a vertical flute, having about half length of standard Shaku-hachi (尺八) with same 5 tone holes structure (4 in front, 1 backside). Shortest or highest range Shaku-hachi is also called Hitoyogiri (一節切 (ひとよぎり)), Tempuku looks like another version of hitoyogiri. Since it acoustically has no significant difference from general category of cana and/or shaku-hachi family (except key), its identity stems on, in large, cultural or ethnicity, or particular kind of locality music, and the way of heritage for hundreds of years, as briefly addressed in following pages. Gottan, on the other hand, could be explained as wood board substituted Shamisen (三味線) at its radiating membrane. While banjo and/or shamisen use small animal skin or plastic sheet for radiating membrane, all-wood-made (except strings) gottan can be easily fabricated by, in old days, any country-side folks, using as available excess or extruded woods at hand. Here again history, culture, ethnicity, heritage are major points for identity. Kagoshima has other locality music instruments such as well known Satsuma-Biwa, which is not addressed here due to limited page space and presentation time.



天吹について

前頁に書いておいたように天吹に関してはその音楽音響学的な事より歴史的文化的な“物語り”の全体像の方が重要なように思われる。しかし先ずそのバンブーフルートの一群の中での位置付に振れておこう。最も簡単な言い方をすると、これは5穴の垂直フルートであり、大略A(440Hz)を基音（筒音）とするので、調性を標榜するならばケーナや短簫（韓国）がD管であるのに対し、3度下のA管という事になる。伝統的に天吹の曲であるとされる数少ない古曲の中に出て来るのはこのAの上の1オクターブ分のペンタトニックな6音すなわちACDEGAだけであるが、最近の普及活動ではもちろんその上のオクターブも使う。天吹の楽曲をタブラチュア記述ではなく五線譜記述するにはA管である



る事は忘れてピッコロと同様に実音オクターブ移動のin-Cで扱う。具体的な寸法の例を比較して示すとこの表の通りであるが、尺八やケーナの仲間は内径に逆テーパー（先端部ほど細くなる）をつける事が多いので、管の長さから基音の音高（ピッチ）を逆算する事は一般的には困難である。ピッチの問題は、さらに、次に述べる自作主義とそれへの伝統的ガイドラインのせいでややこしい事態を招いている。天吹の歴史は書誌学上は慶長8年の日葡辞書まで、伝説的にはその直前の豊臣秀吉の朝鮮遠征にまで遡る

天吹	31.6cm
一節切	33.6cm
正倉院尺八	43.0cm
普化尺八	54.5cm

事ができる。当初は高位の神職が神事に際して結界した降神するために奏鳴したと伝えられ、その透徹する音色はその場に相応しいという旨の古文書がある。が、歴史を下ったその後の“事件”も背景として非常に重要である。ここでは鹿児島特有の郷中教育の中に暗黙に組み入れられ、また薩摩琵琶とともに若衆のたしなみとされ、江戸時代末期から明治中期にかけて大流行があり、またその反動による禁止令により伝承が中絶、昭和30年代に有志によりこれを復活復元したという大物語を指摘するにとどめる。上記の画像（いずれも陶磁器のつけ絵）にて雰囲気としてご理解いただけるかと思う。

さて、天吹の“約束事”には一定の注目を置かねばならないだろう。素材が県内には広く自生しているコサン竹（布袋竹とも呼ばれる）という細目の竹である事は伝統と伝承という点からは重要かとも思うが、音楽音響学の視点からは大きな意味は見出せない。しかし吹き口（歌口）の切り欠きのスタイルが外から中に削る尺八より中から外に削るケーナや短簫に近いという点、また独特かもしれない逆テーパーのつけ方、などは今後さらなる研究を誘導するであろう。



しかし伝え聞く所の下記の約束事ないし“しきたり”は天吹の立場を明確にする意味でそれ以上に、ないしことによると最も重要な意味を持つように思われる。すなわち、

天吹は、自分の楽器は自分で作らなければならない、ないし、他人の楽器を借りて吹いてはならない。

天吹は、自分が作った物をひとに譲ってはならない。売買するなどもってのほか。

天吹は、無伴奏で独奏するべき物であり、伴奏や合奏をしてはならない。

天吹は、有償で演奏したり指導したりしてはならない。つまり、授業料や入場料はとってはならない。

等々である。その一方で楽器の作り方の指南書ないし指示書としては非常に大まかな指示しかなく、例えば穴の位置や間隔は実寸ではなく“指の幅の数”で指示され、また演奏方法の指南書や楽曲の記譜は、少なくとも昭和30年代にあって復元運動が起こるまでは皆無であったと思われる。勿論抑圧の結果失われたと言う見方も出来ようが、発見されて

いない。結局、天吹は、耳から覚えた先達の演奏を自分も行えるようになるまで、藪に入って竹を見立てて採取する所から起始して“全部自分です”のである。これらを敷衍総合するならば、楽器は人の体の一部のような物で、その属人性こそが重要である、と聞こえる。しかしこのメッセージの裏を見ると、素材と工作法の、従ってその構造の不確定さがピッチやスケールやソノリティーの不確定さを惹起し、音色や音楽挙動はおろかピッチさえも属人的な物になってしまい、とてもとても合奏や伴奏つき演奏は出来た物ではない（なかった）という穿った(?)見方が出来る。もちろん現在はピッチを合わせた正確な小規模量産また販売の体制は存在し、一定の教授体制もあり、これが支持人口の増加と伝承の一方的な途絶の防止に一定の役割を果たしていると考えられる。天吹の将来は、従って、如何にしてこのような高潔な呪縛を解き、新しい音楽と新しい支持人口を得るかに懸っているようである。正規2管編成のオーケストラに伴奏された天吹のためのコンチェルトは、将来存在すると信ずる所であるが、一体どんな曲になるだろうか。作曲者がせっかく天吹のために作曲しても、出来た楽曲を気に入った奏者に勝手にピッコロやケーナでやすやすと吹かれてしまったらどうなんだろうか。しからば天吹とは、ないし天吹らしさとは、音楽的に、また音楽音響学的に何なのだろうか。

ごったんについて



ごったんを鹿児島県固有の楽器と言うのはすでにかかなりの語弊がある。何とならばそう言えた時代は既に去ってしまい、現時点では宮崎県えびの市や三股町において、行政の支援もあってささやかなりとも地場産業として伝統が復元され、修行後継者も含め見事に定着しているからである（次ページの写真）。ごったんにも天吹と同様に深遠な歴史があり、また抑圧と廃絶の危機、および有志による復活、保存、伝承の物語りがある。天吹は神道がらみであったが、ごったんは仏教と大きな縁があり、斯藩における江戸期を通じての一向宗（浄土真宗）抑圧をかいくぐって続けられた隠れ念仏の代用歌の伴奏用だったと言われる。また動物（四つ足）の皮を用いる事への宗教上の抵抗もあったとも言われる。さらにごったんには一時期、箏と同様に“職業奏者は盲人”と言う社会的位置付けがあった時代があり、この時代には表に出難い、やや暗い物であった。

歴史を用語法ないし語源でたどると、諸説あるものの、これは中国雲南省の民俗楽器“古弾（グータン）”から来るとされている。伝来は 500 年ほど遡ると考えられるが、同じ中国にある板胡（放射面が薄板で出来た二胡）との関連は明らかでない。天吹もごったんも、また尺八も、かつてはどの農家にもある、楽器というよりもごくあたりまえの民具だったと思われ、日々風呂上がりの余興とかに奏でられ、日常生活の中にとけ込んでいたようである。

ここでとりあえずごったんの音楽音響学的な解釈ないし解説をさせていただく。初めに述べておいたように、普通の三味線や蛇皮線を皮三味線と呼ぶならばごったんとは板三味線の事だと言えば一般大衆には一応の理解が得られる。板三味線という代りに箱三味線とも言う。その弦と駒および弦を張り渡す手段手法は本質的に三味線と同じであり、弦も駒も同じ物が使える。最も伝統的な胴体の外形はまさに一

升枡のような直方体であり、什器の重箱が原形であるとされる。しかし使用者の好みに合わせて三味線のように丸っこい形に仕上げる例もあり、また表板に所望の形状寸法の穴を穿つ事もある。また棹の長さや駒の位置は三味線と演奏技法上で互換性を保つように配慮されている。しかしごったんには三味線の代用品ないし簡略化設計品、ご当地素材適応品という見方では決して理解され得ない物がある。

ごったんに関して音楽音響学から最も感心がもたれる点は結局の所、放射面になる表板の素材や厚さ、また調性の仕方である。表板として使用する古木はその寸法安定度と素材の均質性の点で竹材における“煤竹”と同じ思想で、五十年～百年物の古い農家の解体の時に得られる、囲炉裏の煙で燻され尽くした杉の梁を最も尊重する。表板の実装時の厚さは標準的には 3.5mm 程度であるが、使用する“煤木”の性状や木目の状況に合わせて個々に調整しつつ実装する。また組み立て実装は接着でのみ行い、釘や留め金のような金属部品は一切使わない。

図は啓蒙用も兼ねて観光土産として店頭販売されている大小のごったん（えびの市）、および木工技術の教育用に再開発されたごったん（鹿児島大学教育学部）である。後者はごったんの音楽の教育や再生にも貢献し得る筈だが、残念ながら現時点ではそこまでは至っていない。

ごったんは撥（ばち）を用いず素手でのみ弾く。その音は清涼透明な感じの音である。この清涼透明という感触は二胡に比較して板胡の与える印象と同じように思われる。楽器が鳴る（弦の得た共振性の音響エネルギーを空中に放射す



る) 原理は実質的に三味線と同じでも、この撥く機構が鋭い撥(ないし爪、ピック)か軟らかい指の先かという違いと、放射手段が軽い膜か質量が気になる板かという相違とに由来してこのように音に違いが生ずる。前者の理由は箏とハープの音の違いと同根であるから理解しやすい。後者の理由は質量だけではなさそうで、総合的には放射手段自身がどう言うフィルタ特性を持つか、入力側は駒の先の弦と、また出力側は空気とのインピーダンスマッチングはどうか、という見方が必要になる。またバイオリン族の場合もそうだが、呼吸動作で放射を行う胴体には何処かにサウンドホール(バイオリン族の場合はf穴と呼ばれる細い穴)がないと低域の放射が減って“堅い”音になる。これはスピーカーボックスが密閉箱か、抵抗性のリークがある箱か、リークが非常に大きいバッフル板相当の構造か、またいわゆる“バスレフ”構造の損失性共鳴箱かという違いと同根である。しかしギター風の響きを求めて研究の上で特定の構造のサウンドホールを設定した物もあるが、元来のごったん(例えば荒武タミ愛用の太郎号)は穴なしの密閉箱つまり内部の空気のコンプライアンスがまともに負荷される構造である(下図)。ごったんの清涼透な音はこの密閉箱構造の胴体に由来するのかもしれない。この点も含めごったん固有の音には当事者には深いこだわりがあり、廃れかけたこの楽器の復元に際して、出て来る音をたよりに(つまり修練を積んだ奏者の耳を頼りに)苦戦した、復元のプロセス上での最大の山場だったとされる。

ごったんもその将来は楽器造りの伝承の維持だけではなく、支持人口の拡大、また新しい音楽理念の創出に懸っていると考えられる。支持人口の拡大が、言いかえるとかつてのようにどの家にもあり、誰でも弾けるという状態が復元できれば自ずと新たな音楽へのいとぐちになろうかと期待する所である。



ギター風の音になるようにサウンドホールを設けたごったん(左)と、オリジナルの穴なしごったん(右)。後者は高名な盲目奏者荒武タミが愛用した“太郎”のレプリカである。

謝辞

本稿中の画像には下記の各筋の公開情報を許諾を得て再掲載させて頂いた物を含む。ここに列記して謝辞にかえる。

鹿児島県、鹿児島市、南日本新聞社、鹿児島大学、伊達廣隆、横井勝己、幸田学

参考文献(参考情報源)

ネットの時代に個々の文献を列記するのは既に齟齬な印象を持つので検索用のキーワード(本稿中にない語句)を列記してこれにかえる。

(天吹): “天吹同好会”、“天吹秘帳”、“天吹工房”、“鹿児島県>天吹”

(ごったん): “えびの市特産品”、“荒武タミ”、“黒木俊美”、“広報みまた>ごったん”、“鹿児島大学木材加工研究室”